

主 題：こんな時代に生きていても
聖書箇所：ユダの手紙 24、25節

キリスト教2000年の歴史は人間が真の神を否定しつづけてきたともいえます。時には自分の主張のためにみことばを捻じ曲げたり、また、神を主権者の座から引きずり落とし、自分をその座に据えるということが行なわれてきました。聖書にある神のわざを信じないように仕向けたり、ご利益的に解釈したりと、このようなことは教会内においても見られてきたのです。今日もまさにそのとおりといえます。このような状態をパウロはこう記しています。2テモテ3:2-5「そのとき人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、

裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快樂を愛する者になり、見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。」。また、同じ4:3,4には人々が

健全な教えに耳を貸そうとはせず、真理から耳をそむける、そんな時代になると書かれています。そして、教会の中からこのような人たちが現われるのだと言います。

ユダの手紙は、偽教師たちの惑わしの中に置かれているクリスチャンに対して、クリスチャンは何を願って生きるべきかを教えています。これは今の私たちにも同じように教えられることです。ユダは神を信頼して生きてゆくために、さまざまな危険があると言いつつも神の前に立つ希望と確信を述べ、最後に頌栄、アーメンと結んでいます。私たちも同じようにアーメンといえるように24,25節を学んでゆきましょう。

☆このような危険な時代にあっても、なぜ神を信頼し希望をもつことができるのでしょうか？

原語ではこの24節のはじめに「～できる方」ということばがあります。可能であるというのです。神はできる方なのです。全能のお方だと言います。二つのことを教えられます。

1. 私たちクリスチャンを守り導くことができる神を知っているからです。

「守り」ということばは1節に「守られている」と21節に「保ち」とありますが、これはそのとおり「守る、保つ」の意味ですが、24節は何から守るのかを示す深い意味を含んでいます。危険から、隠されている危険から守ることができる、というのです。「つまずかないように」ということばは新約聖書ではここだけ出てきます。揺るぐことなくしっかりと立つ、という意味です。これの反対のことば「つまずく」ということばは4回見られます。ヤコブ2:10「一つの点でつまずく」、3:2「多くの点で失敗をするもの、…ことばで失敗をしない人がいたら、」、1ペテロ1:10「つまずくことなど決してありません。」、ローマ11:11「彼らがつまずいたのは倒れるためなのでしょうか」です。これらは私たちの日々の信仰生活においてつまずくこと、すなわち、神の前に罪を犯すこと、道徳的なつまずきのことです。しかし、神は真理から離れることなく、神の道をまっすぐ歩んでゆけるように守ってくださるというのです。どんな問題も神には不可能ではありません。私たちに与えられた救いを最後まで完成してくださるのです。

2. 神の前に私たちは受け入れられていると知っているからです。

「…栄光の御前に立たせることのできる方に」、これは私たちの信仰生活のゴール、神の前に立つときです。神によって選ばれ救われ守られている私たちはいつの日か神の前に立ちます。そのとき、神は私たちクリスチャンを聖いもの、傷のないものとして、栄光の御前に立たせてくださるのです。パウロもこのように言っています。エペソ1:4「神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」、コロサイ1:22「…それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。」。これが神の目的です。救いのみわざの目的なのです。神は私たちが神によって贖われ、傷のない者、神に受け入れられる者、キリストに似た者として神の御前に立つという、そのわざを完成することができる方であり、私たちは必ず神に受け入れられるのだという希望を教えているのです。そのときに、「大きな喜び」があるのです。当然のことです。この「喜び」は楽しむと訳すことができますが、新約聖書のほかの箇所には「喜び樂

しむ」と表現されています。マタイは喜びおどると記しています。黙示録 19 章には、御座におられる神の前で喜ぶ様子が書かれています。7 節「私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。」と。神はこれを私たちに確証してくださるのです。なぜなら、神はそれができるお方だからです。1 ヨハネ 3:2「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」とあるとおりです。そして、3:3「キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」と、これが私たちの責任です。

このように私たちはどんな問題の中にあっても、神を信頼し従ってゆけるのです。

そして、神は私たちに命じておられます。「神を礼拝する」ことです。25 節からその理由を見てゆきましょう。

(1) 私たちは唯一の神を知っているからです。

ユダの時代にも神が唯一であることを否定する人たちはいました。ユダは言います。「救い主である唯一の神」と。さらに、この神は「私たちの」神です。それは、主イエス・キリストを通して、私たちの救い主となってくださった、その唯一の神だと。ヨハネ 14:6「…わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」、イエス・キリストを通して、唯一の神は私の神となってくださったのです。だから、この神を礼拝するのです。

(2) 私たちはこの救い主である神がどんな神かを知っているからです。

ここには四つのことが書かれています。

栄光＝これは神がもっている特徴の総括であるといえます。神のすばらしさ、その輝き、神の臨在そのものです。これが顕著に表現されているのは黙示録です。新しいエルサレムは神の栄光によって輝いているとあります。

尊厳＝このことばは新約聖書には 3 回しか出てきません。神のすべてのものを凌ぐ力、何ものにも優るその力です。ほかのすべてのものよりはるかに偉大であるというのです。

この二つは神の特徴を教えています。私たちがすることは礼拝です。次に、

支配＝直訳すると「力」です。神だけがもっておられるその全能の力です。計画したこと完成する力です。

権威＝主権者であり、創造者であるゆえに完全な力をもって成し遂げることができる、その特権です。

この二つは神の主権を教えています。

このように、私たちは神がどのようなお方かを知っているから、礼拝するのです。

(3) 私たちはすべてのときにおいてこの神を礼拝するべきです。

神は礼拝を受けるにふさわしいお方です。ここには三つの時代区分がされています。「永遠の先にも」とはすべての時代の前に、永遠に続くその過去です。これはユダの祈りではなく、宣言です。「今も」は進行形です。体験させてくださる今、現在です。そして、「世々限りなく」、未来です。

私たちは生きて行く限り礼拝します。どのように時代が移り行き、悪い時代になったとしても、私たちが神に対してできる行為は礼拝です。聖書が教える神を信頼し、従ってゆくのです。

ユダは最後にアーメンと強調しています。これはヘブル語で「その通りです」という意味です。ユダの確信であり、私たちにとっても、アーメンなのです。